

## ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景 (4)

ルネッサンスからロマン主義まで

藤田 博子

### Ⅲ. 北方ルネッサンスとマニエリスム

#### 3. ドイツ・ルネッサンスからロマン主義まで

ドイツ・ルネッサンスは、美術的なものより、宗教的色彩が濃く、宗教と社会に鋭い批判を加え、宗教改革と密接な関係を持ちつつ展開している。このドイツ・ルネッサンス(厳密にはマニエリスム)を代表する画家に、デューラー(Albrecht Dürer, 1471-1528)とクラナッハ(Lucas Cranach, 1472-1553)がいる。写真—

39のデューラーの『まひわの聖母』の、祈禱書をしっかりと

りと閉じ、しどけないほどくつろいだ様子の聖母が膝に抱いているおさな子は、生き生きとした生命の躍動を漲らせ、弾むようである。写真—40クラナッハも聖書を主題に、あるいは聖書を離れて、健やかな幼児を数多く描いている。彼は、ルター(Martin Luther, 1483-1546)の友人であり、宗教改革運動の支持者としても有名である。さらにこの時代、エラスムスの肖像画を描いたことでも有名なホルバイン(Hans Holbein, 1497-1543)は、一五二八年に素晴らしい写真をもって、自分の妻と



▲39 デューラー 『まひわの聖母』

子どもたちの肖像画を描いている。複雑な精神の懊悩を漂わせる婦人の膝に、簡素なベビー服を着けた幼児と、利発そうな一人の少年が描かれている。これ以降、絵画のなかに現実の子どもたちが生き生きと個性を付与されて登場してくるのである。しかし、ドイツにおいて特徴的なことは、十六世紀なかばルターによってなされた宗

教改革の精神は、カトリック的救済思想を根底から覆して、合理主義を徹底したため、時の流れとともに、人々は、プリミティブな原始宗教、自然のなかに神を見る非合理的な汎神論的信仰に憧れはじめた。また、デュラー以来、ドイツの芸術で優位を占めていたイタリア・ギリシアへの憧憬は、滅びゆくものや、自然的精神を愛

するロマン主義の基礎を固めていくのである。この精神性をさらに求め続けたのが、ルンゲ (Philipp Otto Runge, 1777-1810) であった。これらの画家たちは、人間自然にも深い精神的価値を付与したのであった。ルンゲは『小さい朝』のなかで、中央に女性を描き、その下にあたかも大地から誕生したかのようにみどり児を描



▲40 クラナッハ

いている。みどり児は宇宙の朝を告げる初子<sup>はつこ</sup>とでも言いたそうである。彼はこの他に一連の絵のなかに身近な幼児を温かなまなざしで描いている。ドイツ・ロマン主義において最も深遠な思想を持つ詩人、ノヴァーリス (Friedrich von Hardenberg Novalis, 1772-1801) は『断章』のなかで、ロマン主義的世界観を魔術的観念論

と呼び、その不可思議こそが、自然と人間のあらゆる生命を認識していく過程であると述べ、「世界はロマン化されなければならない。そうしてはじめて、本来の意味が再び見出されるのである。…ものみなに深い意味を付与し、ありふれたものに神秘的な外観を与え、馴染みのものに未知の厳格を与え、有限のものを無限にみせる。

これを私はロマン化と呼ぶ。」と述べている。こうした思想は、これまで見過ごされてきた女性や子どもに尊厳を与えるものであった。

時代をやや下って、ロマン派画家ウンゲル (Friedrich Unger, 1811—1868) は、一八四四年に、『フリーベルの依頼を受けて、『母の歌と愛撫の歌』の挿画を手掛



▲41 ウンゲル『母の歌と愛撫の歌』の挿画

けている。図141の絵は、何気ないありふれた牧歌的な家庭生活に神秘的な夢を添え、母性に崇高な意味を付与し、子どもに神の栄光を与えている。この著の一九二七年版の編者、プリューファ (Johannes Puffer) は、その跋文において、「人間の中に無意識なものを発見したのは、ロマン主義思考の功績の一つである。フ

レーベルは『母の歌と愛撫の歌』において母性的本能に芸術性を見出させようとしたのである。」と語っている。母性本能が芸術性ならば、幼児は最上の芸術品に働しよう。

写真142はドイツ・ロマン主義を代表する画家シャドウ (W. von Schadow, 1788-1862) 『画家の子どもたち



▲42 シャドウ『画家の子どもたち』

ち』一八三〇年の作品である。清らかな輝きを湛えた、この絵のなかの少女ゾフィは、長じてミケランジェロのソネットとダンテの『神曲』の翻訳家としてその名を残している。ドイツ・ロマン主義最大の教育者フレーベルが、主著『人間の教育』を著したのは、この絵の描かれた四年前の一八二六年であり、彼がその著の哲学的命題を体系づけた『恩物』を考案し、「さあ！ われわれの子どもらのために生きよう。」と高らかに謳って、ロマン主義の最も自由で大胆な表現である『幼稚園 Kindergarten』を創設したのは、この絵が描かれた一八三〇年代のことであった。フレーベルが命名した Kindergarten という名前のものに、幼児発見の哲学的命題

〈参考文献〉

1. 笥田知義・岡田渥美編『教育学群像』アカデミア出版 一九九〇
2. 会田雄次著『ルネッサンスの美術と社会』創元社 一九五七
3. 上智大学思想研究所編『ルネッサンスの教育思想(上)』東洋館出版社 一九八五
4. 長井和雄編『ロマン主義教育再興』東洋館出版社 一九八五

がひそめられているといえよう。因みに、フレーベルが創設し、命名した『幼稚園』は、その二十七年後の一八七六年に、早くも東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)に付設されたのであった。

以上のように、ヨーロッパ絵画にみる幼児発見は、十三世紀、フィレンツェに花開いたイタリア・ルネッサンスの輝かしい人間再発見にその源を持っているといえよう。そして、その精神はアルプスを越え、北方ルネッサンスに火を点し、フランス・ルネッサンスで熾烈に燃え、ドイツ・ロマン主義の疾風怒濤のなかで、より確かな幼児発見を成し遂げたといえよう。

5. Jean = Jacques Rousseau : ÉMILE OU DE L'ÉDUCATION 『エミール』樋口勤一訳 白水社
6. Fredelick B. Artz : FROM RENAISSANCE to ROMANTICISM 『ルネッサンスからロマン主義へ』望月雄二訳 音楽之友社 一九八三
7. Herbert von Einem : DEUTSCHE MALEREI DES KLASSIZISMUS UND DER ROMANTIK, 一七六〇 『ドイツ近代絵画史へ古典からロマン主義へ』神林恒道・武藤三千夫共訳 岩崎美術社 一九八五
8. 高階秀爾著 『フィレンツェ』中公新書 一九六六
9. 樺山耕一著 『ルネッサンスの人と文化』NHK市民大学 一九八九

— 完 —

(浪速短期大学)